

〈原著論文〉

大学生の成育環境イメージが快適な生活環境条件および将来の 生活スタイルに及ぼす影響

澤村 博* 川井 昂*
阿部 信博** 小山 裕三**
青山 清英* 石井 晶子***

Influence of Different Childhood Environment Conditions Images on Comfortable Living Environment and Lifestyle in Future of University Students

SAWAMURA Hiroshi* KAWAI Takashi*
ABE Nobuhiro** KOYAMA Yuzo**
AOYAMA Kiyohide* ISHII Akiko***

The objective of this research is to clarify the relationship between different childhood environment images and (1) factors to become interested in nature, (2) involvement with nature in daily life, (3) degree of comfort in the current living environment, (4) essential conditions to live a comfortable life, and (5) selection of lifestyle in the future.

Survey results indicate the following:

- 1) University students who grew up in the country seek involvement in nature in their daily life, as a comfortable condition for living in their current and future lifestyles. The reason for this is their many opportunities to be involved in nature during their daily life when growing up.
- 2) University students who grew up in the city seek convenience in their daily life, as a comfortable condition for living in their current and future lifestyles. The reason for this is their limited involvement with nature through extraordinary leisure activities when growing up. As a result, they do not strongly seek nature as a comfortable condition for living in their daily life.

Keywords:

childhood environment, natural environment, lifestyle, living environment, comfortable condition

* 日本大学文理学部 (College of Humanities and Sciences, Nihon University)

** 日本大学理工学部 (College of Science and Technology, Nihon University)

*** 東海大学課程資格教育センター (非常勤講師) (Licenced Professional Training Center, Tokai University)

1. 問題の所在と本稿の目的

レジャーとは、一般的に労働時間以外の個々の自由な時間の諸活動と言われている。またレジャーと自然環境は、密接な関わりをみることができる。日本におけるレジャーの歴史を振り返ってみると、「レジャー」という言葉から与えられるイメージは、「人工化された自然」と「非日常的な活動の場所」として捉えられる傾向にある。

まず「人工化された自然」という捉え方には、日本のレジャー産業の発展が深く関与している。日本のレジャー産業は、高度経済成長期やバブル経済期をピークにして、大きな成長を遂げてきた。しかしその成長の過程は、行楽地やレジャーランドを建設することで、多くの自然を壊してきた過程でもある。換言すれば、われわれ日本人は、自然を破壊しつつ、人工的なものに作り替え、その「人工化された自然」をレジャーの対象として利用してきたのである。そして自然と親しむことを目的としたレジャー活動は、実は「人工化された自然」を体感させるものにすぎなかったのである。またこうしたレジャーの定着は、「非日常的な活動の場所」としての自然観を植え付けることにもなる。例えば、「自然」と触れ合うためのキャンプは、一つの特別な行事として位置付けられている。あるいは森林浴の目的である「癒し」にしても、日常とかけ離れた森林へ行くことで得られる効能である。このように、現代の多くの日本人にとって、自然体験とは「人工化された」、「非日常的な活動の場所」として捉えることが多くなっている。そこで本稿では、このレジャーを「非日常的な場所での自然体験」と意味付けておくことにする。

しかし近年、環境問題の深刻化などを背景にして、人間と自然との「共生」が叫ばれるようになり、自然に対する価値観の転換がなされるようになってきた。それは、人工化された自然ではなく、ありのままの自然を見直そうという動きである。また非日常的な活動をするための場所としての自然ではなく、日常生活の中に自然を組み込んでいこうという動きである。この一連の動きを通して、レジャー資源としての自然から、日常生活で慣れ親しむ自然へと価値の転換がなされてきたのである。こうした人間と自然との「共生」という考え方は、これまでのレジャーと自然との関係を根本から転換させるものでもある。

しかし人間と自然との「共生」に関する研究の蓄積は、あまりなされていないのが現状である。従って人間と自然との「共生」には生活環境に対してどのような配慮が欠かせないものなのかという点は、研究を蓄積する上で重要な知見となるであろう。そこでまず本稿では、自然と「共生」している者と、そうでない者とは、生活の快適さにどのような違いがあるのか。また両者では、将来のライフスタイルにどのような違いを見せることになるのか。こうした点を明らかにしていくことを目的とする。

2. 分析の視点

生活環境への快適さには、自らのもつ自然観が密接に関係しているといえる。そうであるならば、まず自然観がどのように形成されるのかということを検討する必要がある。そこでここでは、自然観の形成に関しての先行研究を整理し、これまでの研究でどの点が欠けていたのかを検討していくことにする。

まず、この自然観の形成には、成育環境が深く関わっているという指摘がある。奥野（1972）は、文学表現の中にみられる作者の内的イメージと風土・風景との密接なかかわりは、自己形成空間である原風景に支えられていると考察し、「“原風景”とは、その作家の幼少年期と思春期とに形成されるように思われる。生まれてから7・8歳頃までの父母や家の中や遊び場や家族や友だちなどの環境によって無意識のうちに形成され、深層意識の中に固着する」¹⁾と述べている。つまり幼いころの成育環境が、自然観に影響を及ぼすということである。

また感性や感情の働きも、自然観の形成にとって重要である。このことに関して、呉（1998）は、次のように述べている。自然観とは「どのようなものにどのくらい自然らしさを感じるかという感性的側面」²⁾と捉え、環境価値観の形成要因を検証している。つまり自然観の形成過程は、客観的な存在物の中に自然がどのように存在しているかを主観的な判断や感性で捉えていくのである*1。木村（1998）も同様の指摘をしている。すなわち風景は、視覚に媒介されることにより、「情」と結びつくことで「風情」「情景」「景観」としてそれぞれのわれわれの中に意味をもつものとなる、と述べている。つまり風景とは、「客観としての「景」と、主観としての「観」との統一」なのである。この

ように自然観の形成において、主観的要素、なかでも感性的側面や感「情」的側面が重要であるといえる。

この自然観の形成に関して、沢田は「構造」ということにふれている。沢田は知覚の風景を日常生活の安定性と関係づけて捉えている。沢田(1975)の述べる風景の安定は、「風景のできるだけ多くの部分が構造化され、かつこの構造が有効に働いていて変更する必要がない」⁶⁾状態であると指摘している。このように沢田のいう各人がもつ知覚の基本構造が、様々な体験や経験をするなかでパターン化され、自然に対しても意味づけられ構造化し、自然観が形成されていくのである。

以上のことから、生活環境の快適さの判断に重要である自然観の形成には、幼少期の成育環境が大きな影響を及ぼしているという知見を得ることができた。また成育環境のなかで、自然に対してどのような感性・感情的な働きかけをしたのか。また自然に対する意味づけが、どのように構造化されているのかが、自然観の形成に大きく関わってきていることが理解できた。

自然観の形成についてのこうした指摘は、人間と自然との「共生」を考える上で重要である。しかし体得してイメージ化され、構造化された自然観が、生活スタイルへどのように影響を与えるかについては、十分に議論がなされているわけではない。つまり成育環境のイメージが、現在の生活環境の快・不快要因にどのように結びつくのかといったことに関しては、充分には検討されていないのである。それは例えば、成育環境イメージの違いが、生活環境における快適要因として「自然」を選択するのか、あるいは「都会的」な便利さをを選択するのかという相違に関連しているのかといったことである。

そこで、本稿では、これまでの先行研究の知見を踏まえつつ、主観的な感性で捉えた自然観が、具体的に快適な生活条件としてどのように現れるかを検討していくことにする。具体的には、成育場所のイメージの差異と次の5項目①～⑤との関連性を検証していく。①自然へ関心をもつようになったきっかけ、②日常生活での自然の親しみ方の違い、③現在の生活環境の快適度、④快適な生活条件を過ごすために何を必要条件としているか、そして⑤将来のライフスタイルのタイプの選択との関連を明らかにする。そしてこれらの分析を通して、必ずしも自然が原風景となりえていない

今日の状況のなかで、日常生活の中で自然といかに「共生」するのか。また今後それぞれの地域に適した自然観をいかにして形成するのか。さらに自然を教材としてどのような自然観を育成するか、といった教育的課題の礎を提示する。

3. 調査の方法

(1) 調査対象と時期

本調査で用いたデータは、1999年5月～6月にかけて、都内及び都内近郊にあるN大学の2年生以上の学生1054人に対して行った質問紙調査(自記式集合調査で実施し、一部自記式個別調査が含まれる)の結果である。

ここで大学生を調査対象としたのは、以下の理由による。大学生は、近い将来に、就職先や住居などを、自らの判断で生活スタイルを確立する時期にはいると考えられるためである。将来のライフスタイルについて初めて考え始めるようになるのは、学生時代であると判断したからである。

(2) 調査の枠組み

前述したように、成育環境がどのような環境であったかは、個人的・主観的な判断によるものであり、「情」を媒介として形成されるものである。そこで本稿では、大学生が主に住んでいた(成育した)場所を本人のイメージをもとに区分した。具体的な区分は、主に①「都会」的なところ、主に②「田舎」的なところの2つのグループとした*2。

両者の構成比は、以下の通りである。成育環境が都会的なイメージであると答えた者は、503人(48.6%)であり、田舎のイメージであると答えた者は533人(51.4%)である。この2つの成育環境イメージをもとにして、快適な生活条件の違いや、将来のライフスタイルのタイプの選択の違いなどをみていくことにする。

4. 結果および考察

(1) 自然への関心をもつようになった要因

成育環境の違いによって、自然への関心の持ち方が異なると考えられる。そこで成育環境ごとに、自然へ関心をもつようになったきっかけを検討していくことにする(表1)。

表1 自然に関心をもつようになった要因

(複数回答)

	原風景	キャンプ ^註	メディア/ 雑誌等	散策/ ハイキング	アウトドア スポーツ	学校での 行事
都会 (N=1144)	16.3%	18.2%	13.7%	8.6%	9.1%	7.3%
田舎 (N=1353)	24.9%	16.4%	11.4%	5.5%	8.7%	6.7%

注) キャンプは、友人、家族などに行く活動で、学校キャンプと区分した

まず自らのもつ原風景が自然へ関心をもつきっかけとなっていることについてみてみることにする。自然豊かな環境のなかで成長していくことによって、自然的環境が原風景として形成され、蓄積されることになる。そして、そうした原風景が自然へ関心を喚起することになるであろう。おそらく、成育環境が田舎的イメージの者の方に、原風景が自然への関心を生み出す傾向が強いと予測できる。このことを検証するために、成育環境イメージと、自然への関心を促す原風景との関連をみていくことにする。

成育環境に田舎的イメージをもっている大学生で、「原風景」から自然に関心をもっていると考えている者は、24.9%である。成育環境イメージが都会的イメージの大学生で、「原風景」から自然に関心をもっている者は、16.3%である。都会的環境で育った者よりも、田舎的環境で育った者が、「原風景」をきっかけとして自然へ関心をもったと答える者が多いという予想どおりの結果となっているのである。

次に自然への関心とレジャーとの関係について検討してみることにする。自然に関心をもつようになるきっかけとして、アウトドア系のレジャーが考えられる。それでは成育環境の違いによって、アウトドア系のレジャーが自然への関心を促すものとなるかどうかの違いに結びついているのかどうかをみていくことにする。調査では、アウトドア系に関する項目として「家族や友人と行くキャンプ」、「散策・ハイキング」、「アウトドアスポーツ」の3つの項目がある。成育環境イメージが、それぞれの項目にどのような違いをもたらすのかについてみていくことにする。

成育環境に都会的イメージを持っている者で、「家族や友人と行くキャンプ」を自然へ関心をもつようになったきっかけとしている者は、18.2%であり、田舎的イメージの者では、16.4%である。また成育環境に都会的イメージを持っている者で、「散策・ハイキング」を自然へ関心をもつようになったきっかけとして

いる者は、8.6%であり、田舎的イメージの者では5.5%である。さらに「アウトドアスポーツ」を自然への関心のきっかけとしている者は、成育環境イメージが「都会」の者で9.1%、「田舎」の者で8.7%となっている。ハイキングやキャンプやスポーツといったアウトドア系のレジャーが、自然への関心をもつようなきっかけとなるのは、田舎で育った者よりも、都会で育った者であるということができよう。

このことに関連して、自然への関心を向けるきっかけとなったものとして「メディア・雑誌等」をあげる者も、都会で育った者の方が多くなっている。これは都会的生活環境に育った者が、キャンプやアウトドアスポーツ等のレジャー情報の収集のために、テレビや雑誌を活用していると推測される。

以上のように、「原風景」以外の項目では、全て成育環境イメージが「都会」という回答者の比率が高い傾向にある。都会で育った者たちは、日常生活の中で自然と親しむ機会が少なかったといえるだろう。そのために、人工的な要素が色濃く反映されている自然だとしても、レジャーを通して何とか自然に対して関心をもつことができるようになるといえよう。

その一方で、「田舎」で育ってきたとイメージしている大学生は、非日常的なレジャー活動で自然に関心をもつようになったきっかけとする傾向は低い。それは、なにもレジャーのように特別な活動をしなくても、これまでの自然と共生してきた日常生活のなかで、既に十分に自然への関心が備わっているからではなかろうか。

(2) 成育環境と自然の親しみ方

次に、成育環境イメージが、自然の親しみ方にどのような影響を及ぼしているのかを見ていくことにする。具体的には、成育環境イメージの違いが、自然の親しみ方を生活の一部として「日常的」に親しんでいるか、休日や週末を利用するなどの「特別な活動」として

るかを検証する。

表2 成育環境イメージと自然の親しみ方

		NA=39	
		自然の親しみ方	
		日常的	特別な活動
成育環境イメージ	都会 (N=493)	30.0%	70.0%
	田舎 (N=522)	52.5%	47.5%

いずれも有意差 $p < .05$

表2の通り、育った環境イメージが「都会」で、自然の親しみ方が「日常的」であると答えた者の割合は30.0%となっている。「田舎」では52.5%となっている。つまり生活の一部として自然と親しむようにしているのは、育った環境イメージが「田舎」である大学生に多いのである。また自然の親しみ方が「特別な活動」であるという項目では、育った環境イメージが「都会」の者では70.0%、「田舎」の者では47.5%である。休日などを利用して自然と親しむことを生活スタイルとしているのは、成育環境が「都会」である回答者に多いのである。

このことから、育った環境が「都会」である大学生は、自然を特別な活動の対象としており、成育環境イメージが「田舎」であるという大学生は、日常生活の中で自然と「共生」するスタイルをもって、親しむようにしているといえる。この点に関して補足的に付け加えて、「4 (1) 自然への関心をもつようになった要因」と関連させてみてみよう。前述したように成育環境イメージの相違が、自然への関心のきっかけの差異に現れ、更に自然との親しみ方が「日常的な活動」か「特別な活動」というように、自然とどのような関わりをもつようになるのかを決定づけているといえようである。それほど年少期に培われた自然観は、成長後の自然との関わりを決定づける重要な要因として位置付けているといえよう^{*)}。

(3) 現在の住居地の生活環境の快適度

これまで、成育環境イメージと、自然との関わりについて検討してきた。次に成育環境イメージと、住環境との関係について検討していくことにする。なかでも成育環境イメージが、現在の住環境の快・不快とどのように関連しているかをみていくことにする(表3)。

都会的成育環境イメージをもっている者で、現在の生活環境について「快適」だと答えた者の割合は80.3

表3 成育環境イメージと現在の住環境の快適度
NA=19

		住環境の快適度	
		快適	快適でない
成育環境イメージ	都会 (N=502)	80.3%	19.7%
	田舎 (N=533)	71.9%	28.1%

いずれも有意差 $p < .05$

%である。また田舎の成育環境イメージをもっている者で、現在の生活環境を「快適」だと思っている者の割合は、71.9%である。成育環境イメージが「都会」という大学生の方が、現在の生活環境について、快適だと感じている。逆に「快適でない」という回答者では、成育環境イメージが「都会」である者で19.7%、「田舎」である者で28.1%となっている。成育環境イメージが「田舎」という大学生の方が、現在の生活環境を不快だと感じている。

N大学の立地が東京近郊であるということから、現在の生活環境の場所も、都会的なものであるといえよう。従って、これまで都会の中で育ってきた者にとって、現在の都市的環境は、自分の成育環境と共通点を多くもち、心地よく過ごせる場所となっていると考えられる。しかし自然と「共生」しながら育ってきた「田舎」の学生にとっては、あまり自然のない都市的環境は、自分の成育環境と異なるものである。自然のなかで育った学生にとって、住環境の周りに自然があることが、住環境を快適に過ごすための条件となるということである。そうであるならば、成育環境イメージが、現在の生活環境の快・不快の基準となっている可能性がある。成育環境イメージが生活環境の快・不快と密接に関連していることについて、以下で考察していくことにする。

(4) 快適な生活のための必要条件

生活環境イメージは、現在の生活環境の快・不快の基準となっているのであろうか。言い換えれば、自然に溢れた「田舎」的成育環境イメージをもっている者は、現在の生活環境に対して自然らしさを快適な生活条件とし、便利さに溢れた「都会」的イメージをもっている者は、現在の生活環境に対して利便性を快適な生活条件とするのであろうか。

そこで、成育環境イメージの違いが、快適な生活を過ごすための必要条件の差異に現れるのかどうかを見

ていくことにする。要因は、生活を快適に過ごすための必要条件として何を選択するかに関わるもので、ここでは快適な生活を過ごすための条件として、「自然」「便利さ」の2つを中心に設定した。「自然」に関するものは、「①十分な日光やさわやかな空気」、「②生活が不便でも森・山・川・海・田園風景の自然環境のある生活空間」、「③においがいい飲料水」、「④自給自足のできる場所がある」の4つをあげた。また「便利さ」に関するものは、「①清潔感や整備された美しい町並みや都市景観・住宅環境」、「②コンビニやスーパー、ショッピング街が近くにある」、「③駅の近くで、都市まで1時間以内の住宅環境」、「④生活が利便である生活空間」、「⑤深夜まで遊べる場所が近くにある」の5つをあげた。

この「自然」と「便利さ」に関する項目を用いて、生活環境イメージと、現在の生活環境の快適条件との関係についてみていくことにする。具体的には、育った環境イメージによって、生活の快適条件として、「自然」に関する項目を、いくつあげるのかに違いがでるのか(表4)。また育った環境イメージによって、生活の快適条件として、「便利さ」に関する項目を、いくつあげるのかに違いがでるのかを検討していくことにする(表5)。

表4 成育環境イメージと「自然」に関する項目を快適条件に選択する項目数 NA=18

		自然を快適条件に選択する項目数			
		0項目	1項目	2項目	3項目
成育環境イメージ	都会(N=503)	29.4%	47.1%	19.5%	4.0%
	田舎(N=533)	18.4%	41.1%	30.2%	10.3%

いずれも有意差 $p < .05$

表5 成育環境イメージと「便利さ」に関する項目を生活快適条件に選択する項目数 NA=18

		便利さを快適条件に選択する項目数			
		0項目	1項目	2項目	3項目
成育環境イメージ	都会(N=503)	7.4%	27.0%	43.5%	22.1%
	田舎(N=533)	16.9%	32.8%	37.1%	13.1%

いずれも有意差 $p < .05$

まず「自然」をどれくらい快適条件とするのかをみてみよう(表4)。育った環境イメージが「都会」の者で、「自然」を快適条件として1項目もあげないものは29.4%、「田舎」のものでは18.4%である。「自然」

を1項目だけ選択する回答者は、「都会」では47.1%、「田舎」では41.1%となっている。2項目をあげる人は、「都会」では19.5%で、「田舎」で30.2%。3項目あげる人は、「都会」では4.0%で、「田舎」では10.3%である。育った環境イメージが「田舎」である大学生の方が、「自然」を快適条件として挙げる者が多いのである。

それでは「便利さ」に関してはどうか(表5)。育った環境イメージが「都会」の者で、「便利さ」を快適条件に全く選択しない者は7.4%で、「田舎」では16.9%となっている。「便利さ」を1項目だけ選択する者は、「都会」では27.0%で、「田舎」では32.8%である。「便利さ」を2項目選択する者は、「都会」では43.5%、「田舎」では37.1%となっている。「便利さ」を3項目選択する者は「都会」では22.1%、「田舎」では13.1%であった。育った環境イメージが「都会」である大学生の方が、「便利さ」を快適条件に選択する項目数が多くなっているのである。

このように、どのような成育環境に育ったのかによって、生活環境に対する快適さの条件が異なっているといえる。自然に溢れた環境で育ってきた者は、現在の生活環境の快適さとしても、自然的なものを選択するのである。また利便性に溢れた環境で育ってきた者は、現在の生活環境の快適さとして、利便性のあるところを選択するのである。このことから、成育環境イメージが、現在の生活環境の快・不快の基準となっているといえそうである。

それでは、田舎的成育環境イメージの者は、生活環境の快適さとして、どのような自然を条件とするのであろうか。また都会的成育環境イメージの者は、生活環境の快適さとして、どのような利便性を条件とするのであろうか。以下では、田舎的イメージの者が快適だとする「自然」と、都会的イメージの者が快適だとする「利便性」のより詳しい中身について考察していくことにする。

上記のことを明らかにするために、成育環境イメージによって、快適生活な環境だとイメージするキーワード選択にどのような違いがあらわれるかをみていくことにしよう(表6)。

都会的成育環境イメージをもっている者で、「自然にあふれた感じ」「のんびりした感じ」、「気候が温暖」といった項目を、快適な環境を示すイメージとしてあ

表6 成育環境イメージと「快適な生活環境」をイメージするキーワード

NA=24

		快適な生活環境をイメージするキーワード					
		自然にあふれた感じ	のんびりした感じ	気候が温暖	便利さ	都心に近い	都会的
成育環境イメージ	都会(N=501)	10.0%	18.8%	2.6%	23.4%	2.8%	3.6%
	田舎(N=533)	14.2%	33.6%	4.9%	10.0%	1.9%	1.9%

いずれも有意差 $p < .05$

げた者の割合は、それぞれ、10.0%、18.8%、2.6%である。それに対し田舎的成育環境イメージをもっている者でそれらを快適な環境を表すキーワードとしてあげた者の割合は、それぞれ14.2%、33.6%、4.9%である。このように成育環境イメージが「田舎」である大学生の方が、「自然にあふれた感じ」、「のんびりした感じ」、「気候が温暖」といったいわゆる「自然」あるいは「自然からイメージされる」項目を選択する傾向にある。

次に「生活や交通が便利だから」、「都心に近い」「都会である」といった項目についてみてみよう。都会的成育環境イメージをもっている者で、それらを快適な環境を示すキーワードとして挙げた者の割合は、それぞれ23.4%、2.8%、3.6%である。また田舎的成育環境イメージをもっている者で、それらを快適な環境を表すキーワードとして挙げた者の割合は、それぞれ10.0%、1.9%、1.9%である。成育環境イメージが「都会」である大学生の方が、「生活や交通が便利」、「都心に近い」、「都会である」といったいわゆる「都会」に関する項目を選択する傾向が強いのである。

このように、自然に溢れた環境で育ってきた者は、自然的なもの、なかでも自然が豊かであること、のんびりとした感覚、気候の穏やかさといったものを、心地よく生活する上で大切なものとしているのである。また利便性に溢れた環境で育ってきた者は、便利なものの、例えば、都会的なもの、交通の利便性や、生活上の利便性などを快適な生活をする上で欠かせないと考えているのである。こうした結果からも成育環境イメージが、生活環境の必要条件と密接に関わっていると伺うことができる。

(5) 将来の生活スタイル

ここでは、成育環境が、現時の生活環境の必要条件のみならず、将来の生活スタイルにまで、影響を及ぼ

しているということについて検討していくことにする。

成育環境と将来の生活スタイルとの関係をみるために、まず将来の生活スタイルを表7のようにカテゴリー化した。表7に若干の説明を加えると、このカテゴリーでは「自然」をキーワードとして、自然を住環境の中に共生として選択するのか、あるいは特別な活動の対象としたものなのかを中心に検証した。詳述すれば、自然と共生するものは表7の1と2と5であり、自然を特別な対象としているのは3である。4は、自然を特に生活スタイルの中で必要な価値としていないというカテゴリーである。

表7 将来の生活スタイル

1. 自然が豊かな環境に居住し、平日は都市部に通勤する
2. 自然が豊かな環境に居住し、都市部に通勤しないでいい仕事をする
3. 生活や交通が便利な都市部に居住し、週末や休暇に豊かな自然へ出かける
4. 生活や交通が便利な都市部に居住し、週末や休暇も都市部で過ごす
5. 自然が豊かな環境に居住し、自然に即した自給自足の生活をする
6. 特に都市部や自然の中でといった生活にはこだわらない
7. その他

それでは成育環境イメージと、表7にあげた将来の生活スタイルとの関係についてみていくことにしよう。表8では生活環境イメージの違いが、将来の生活スタイルの選択にどのような相違をもたらすかを示したものである。

まず自然が豊かなところに住みたいかどうかについてみてみることにしよう。都会的成育環境イメージをもっている者で、「自然が豊かな環境に居住し、平日

表 8 成育環境イメージと将来の生活スタイル

NA=19

		将来の生活スタイル						
		住)自然・ 職)都市	住)自然・ 職)郊外	住)都市・ 休)自然	住)都市・ 休)都市	自給自足	こだわらない	その他
成育環境 イメージ	都会(N=501)	10.0%	18.8%	2.6%	23.4%	2.8%	3.6%	2.0%
	田舎(N=529)	14.2%	33.6%	4.9%	10.0%	1.9%	1.9%	1.1%

いずれも有意差 $p < .05$

は都市部に通勤する」という生活スタイルをしてみたいと答えた者は10.0%である。それに対し田舎的成育環境イメージをもっている者では、14.2%となっている。また都会的成育環境イメージをもっている者で、「自然が豊かな環境に居住し、都市部に通勤しないという仕事をする」という生活スタイルをしてみたいと答えた者は18.8%となっている。それに対して、田舎的成育環境イメージをもっている者は、33.6%となっている。居住場所を自然の多い場所にもつスタイルを選択するのは、自然豊かな環境で育った者に多いという結果になっている。田舎的成育環境イメージをもっている者にとっては、将来の生活スタイルに関しても、日頃の生活を過ごす場所に自然を求めているといえる。

次に、居住場所を都市部にもった場合の休日の過ごし方についてみていくことにする。「生活や交通が便利な都市部に居住し、週末や休暇も都市部で過ごす」という生活スタイルを選んだのは、育った環境イメージが「都会」の者で23.4%、「田舎」の者は10.0%となっている。将来住居場所を「都市部」にもった場合、休日も都市部で過ごすスタイルを選択する者は「都会」で育った者に多い。都会的成育環境イメージをもっている者は、将来の日常生活においても、便利さを求めているのである。「都会」で育ったとイメージしている大学生は、将来も日常生活のなかで自然を身近なものとして特に必要としないようである。このように成育環境イメージは、将来の生活スタイルにも影響を及ぼしているといえる。

5. おわりに

これまでの調査結果をまとめると次のようになる。

成育環境イメージが「都会的」であるか、「田舎」であるかの差異は、自然へ関心をもつようになったきっかけの違いにみることができる。自然へ関心をもつようになったきっかけは、田舎的成育環境イメージをもつ

ている者では、これまで「日常的」な体験から沈殿された「原風景」の中に既に存在している。しかし都会的成育環境イメージをもっている者では日常的な自然体験より、レジャーという非日常的な活動をする事によって、自然へ関心をもつ傾向にある。

また成育環境イメージの違いは、自然との親しみ方にも影響を及ぼしている。田舎的成育環境イメージをもっている者にとっては、日常的な生活の中で、自然と親しんでいる。それに対し、都会的成育環境イメージをもっている者は、レジャーといった特別な活動を通して、自然へ親しむ傾向にある。

さらに、生活環境の快・不快の判断にも、成育環境イメージが大きく関わっている。すなわち成育環境を田舎とイメージしている大学生にとっては、現在の都会的な生活環境は必ずしも快適なものではない。その一方で、成育環境を都会とイメージしている大学生にとっては、現在の都会的な生活環境は快適なものである。このことは、どのような要素を快適な生活環境の条件とするのかにも関係してくる。すなわち、田舎的成育環境イメージをもっている者は、より自然的な生活環境を望み、都会的成育環境イメージをもっている者は、より利便性のある生活環境を望むことになる。

その上、成育環境イメージは、将来の生活スタイルをも左右することになる。田舎的成育環境イメージをもっている者は、居住するところには自然が溢れている環境を選ぶ傾向がある。それに対し、都会的成育環境イメージをもっている者は、様々な利便性のあるところを居住環境として選ぶ傾向にある。

このように、成育環境は、現在の生活環境の快適条件に違いをもたらすだけでなく、将来の生活スタイルにも影響を及ぼしているのである。そうであるならば、どのような環境で、子どもたちが育っていくのが重要である。子どもは、育った環境の中から、様々なものを知らず知らずのうちに習得している。そして

物の感じ方や考え方は、日常のかかわりをもつ物や日常の出来事の中で活性化されるのである。従って子どもの成育環境イメージの中に「自然」のある風景をもたなければ、日常生活で自然との「共生」より「利便さ」を好む傾向になってしまうのである。

今後、更にレジャー施設を建設することによって自然破壊が引き起こされていくであろう。その結果、レジャー施設を利用することで、自然とふれあい、自然に関心をもつ子どもたちが、増えていくであろう。しかしそれは日常生活の中で自然と関わりある子どもが減少することを意味している。たとえレジャー施設が増設され、自然と触れ合う機会が多くなったとしても、レジャーによってもたらされる自然は、そもそも「人工的な自然」にすぎず、またレジャーそのものは「非日常的な活動」にすぎない。そうしたレジャー活動では、日常的に自然と接し、自然と共生していこうという子どもたちを増やすことにならないということが、今回の調査結果をみても明らかである。むしろ子どもたちの成育環境にどのくらい豊かな自然を提供できるの方が、自然と共生する子どもを育てるのには重要なのである。

自然破壊が進行しつつある現状において、子どもたちが日常的に自然と接する機会は、ますます少なくなっていくであろう。それでも、子どもたちの成育環境の中には、少ないながらも、まだ自然が残っている。成育環境の中になぜかながらも残っている自然を、どのように保護し、子どもたちにどのように関わりをもたせるのか。こうしたことができるのは、おそらく现阶段では、学校や地域に限られている。そうであるならば、学校や地域では、子どもたちが自然と接する機会をどのようにもたらせるのかをもっと真剣に議論していかなければならないであろう。子どもたちが自然と共生できるかどうかは、学校や地域の活動にかかっている。ありのままの自然と触れ合うレジャーは、日常生活のなかにある。

注)

*1: 寺本や野中(1993)も、同様なことを指摘している。すなわち実証的手法でイメージ空間に現れる具体的な事象から自然観の意味を検証している。寺本: 参考文献8・9参照 野中: 参考文献3参照

*2: ちなみに成育環境イメージに関する「田舎」と「都会」の男女の構成は、「都会」(N=503)=男性70.6%/女性29.4%、田舎(N=531)=男性66.9%/女性33.1%となっている(N A=2)

*3: 男女別の自然の親しみ方は、次の通りである。男性で自然の親しみ方が「日常的」である者は38.3%、女性では48.9%である。特別な活動であるのは、男性で61.7%、女性で48.9%となっている。女性の方が、自然を日常的なものとして位置付け、自然と共生した生活をしている。また男性の方が、自然を日常的なものとして親しむよりも、休日や週末を利用して活動する場所や資源として位置付けている。これは女性が、最近ブームとなっているガーデニングや自宅周辺の散歩など、日常生活で女性が好んで行う活動が影響を与えていると推測される。特別な活動として考えられるキャンプやアウトドアスポーツなど男性が主に好む活動が多いことと関連していると考えられる。

参考文献)

- 1) 木村博、風景の現象的位相—環境教育への一視覚—, 国際教育研究, 第18号, 26-40, 1998
- 2) 呉宣児・無藤隆, 自然観と自然体験が環境価値観に及ぼす影響, 環境教育, 7(2), 2-13, 1998
- 3) 野中健一, 大学生の原風景にみる生活環境の中の自然, 環境教育, 3(1), 1-18, 1993
- 4) 奥野健男, 文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想—, p55, 集英社, 1972
- 5) 佐島群巳, 環境マインドを育てる環境教育, 教育出版, 1998
- 6) 沢田允茂, 認識の風景, p201, 岩波書店, 1975
- 7) 下村彰男, 日常的レジャー・レクリエーション環境の課題, レジャー・レクリエーション研究, 第27号, 42-48, 1994
- 8) 寺本潔, 子どもの知覚環境, 地人書房, 1994
- 9) 寺本潔, 子ども世界の地図, 黎明書房, 1996

<抄録>

本研究の目的は、大学生の成育環境のイメージの差異と①自然へ関心をもつようになった要因、②日常生活での自然の親しみ方、③現在の生活環境の快適度、④快適な生活条件を過ごすために何を必要条件として

澤村博・川井昂・阿部信博・小山裕三・青山清英・石井晶子

いるか、⑤将来のライフスタイルのタイプの選択との関連性を明らかにした。

調査の結果、

- 1) 田舎で育ったとイメージしている大学生は、現在や将来のライフスタイルの中でも、生活の快適条件に日常生活での自然との関わりを求める。その理由は、成育過程で日常生活の中で自然と触れ合う機会を多くもっていることに関連している。
- 2) 都会で育ったとイメージしている大学生は、現在や将来のライフスタイルの中でも、生活の快適条件に利便性を求める。その理由は、成育過程で非日常的なレジャー活動を通して自然と触れ合う経験をしていることと関連がある。そのために日常生活の中で、自然を快適条件として強く求めない。

キーワード

成育環境、自然環境、生活スタイル、生活環境、快適条件

(受理 平成12年2月14日)